

堀田正敦周辺の博物研究と松平定信：堀田正敦の『観文禽譜』（五）

著者	鈴木 道男
雑誌名	国際文化研究科論集
巻	6
ページ	55-73
発行年	1998-12-20
URL	http://hdl.handle.net/10097/34462

堀田正敦周辺の博物研究と松平定信

堀田正敦の『観文禽譜』(五)

鈴木道男

序 もう一つの博物学研究組織

楽翁文人圈と堀田正敦およびその博物研究

松平定信と博物学 付 文人圈の内と外

『観文禽譜』自序・附言を読む——研究組織の形成に通じる正敦の意図

序 もう一つの博物学研究組織

本草学から発達した江戸博物学が生んだ最大かつ最高水準の鳥類図鑑、堀田正敦（1755－1832）の『観文禽譜』の研究の過程で、その成立を可能ならしめた条件として、化政期における社会の広範な階層に江戸個有の諸文化・学術、とくに博物学が興隆した時流をうけて、

- 1) 『本草綱目』の各品目と日本の産物との対応を考証する名物学に源を発し、しだいに薬学から分離して「記載の学」への方向に進んだ独自の日本博物学が（相対的、部分的かつ一時的ではあるが、世界の中でも）高い水準に達していたこと
- 2) シーボルトら西欧人博物学者の来日により、蘭学者の博物研究の水準が格段に向上したこと
- 3) 蝦夷地の経営問題など、日本のフロンティアの確定作業に付随して生じた博物学的知見の増加があったこと
- 4) 博物研究、絵画の蒐集、古典文学研究、珍鳥の飼育といった趣味が大名の間で広く行われるようになっていたこと

を指摘することができた（鈴木 1990、1994ab、1995ab、1996 参照）。

注目すべきは、これらのいずれにおいても正敦が重要な位置を占めていたということである。1) の点では、当時の本草学的博物学者の総帥であった老齢の小野蘭山（1729－1809）を京都から召し出して医学館の講書とした（1799）ことが、上野益三（1973）によってこの分野の中心が京都から江戸に移行したエポックと見做されて以来、それが通説となっているという例に限らず、若い岩崎灌園に薬草園用の土地を与えて本草研究に従事させるなど、江戸を舞台とした本草学の庇護者としての正敦の本領を見ることができる。2) の点では、正敦が大槻玄澤を後見していたこと、大槻家とならぶ蘭学のセンター桂川家の第6代、甫賢が『観文禽譜』製作に深く関与していたことなどから、蘭学者に対しても、その活動を手厚く保護した正敦の姿勢を窺うことができる。3) について、正敦はロシア人が択捉島を襲撃した所謂丁卯事変（1806）の処理のために松前に派遣され、それが

蘭学者たちに北方の情報を収集させる直接の動機となり、またその後蝦夷地から正敦に直接よせられる情報のなかに、鳥の情報がおりまぜられる契機ともなっている。4) については、正敦自身が堀田家伝来の鳥図のコレクションを活用したのみならず、幕閣の中心人物として、諸大名のコレクションを大掛かりに利用している。ちなみに、正敦は『観文禽譜』のなかで鳥を飼育したことはないと述べてはいるが、大名の珍鳥の飼育という趣味が、本論の対象の中で後に重要な意味を持つてくる。

以上の条件が享受できる場——化政期における若年寄の職——が正敦にのみ提供されていたわけではないにもかかわらず、『観文禽譜』に匹敵する内容を示す博物学上の業績が当時の幕府中枢からは量産されなかったこと、そして寛政6年(1794)に尾藤二州の序が寄せられてから、最晩年の1831年頃とみられる最終稿の完成まで、『観文禽譜』には政事に多忙な若年寄在任期間(1790—1832、正敦35歳から78歳の没年まで)とほとんど重なる年月が費やされており、正敦のいわばライフワークであると見做すことができることから、『観文禽譜』は正敦という個人の遠大な意図があつてはじめて成立したと考えられた。そのため今までは正敦周辺に博物研究の協力者が多く存在していたことは確認してきたが、同好の士が協力しあつて形成した研究組織を想定することを、とくにはしてこなかった。

一方、江戸後期のわが国には、博物学の愛好者が集い、互いに知識を交換し、研鑽を深めるサークルが各地に誕生し、そのなかには尾張の藩士を中心とした嘗百社(例えば飯沼慾斎の『草木図説』をみよ)、江戸の大名・旗本らを中心とした緒鞭会(例えば武蔵石寿の『目八譜』をみよ)のように、そのメンバーから高水準の個人的業績を次々と世に送り出すに至る、高い到達度を示す研究組織も現れていた(その詳細についてや、その源が徳川吉宗時代に丹羽正伯がおこなった全国の産物調査や田村藍水や平賀源内らのいわゆる「物産会」があるとされることなどについては、本論では立ち入らない)。また、特別な組織を構成しなかった、細川頼恭や松平重賢を嚆矢とするいわゆる博物大名の業績についても、最近急速に解明と紹介が進んでいる。一つ一つの対象物に、細密な写生図の作成を伴う網羅的な博物的コレクションを遂行するためには、莫大な資金と時間に加えて豊富な情報が要求されるため、その担い手には、本草学の大家を除いては、大名や大身の旗本が大半を占めたことには必然性があつた(平凡社編1994参照)。事実、最近全国で博物学の視点からの調査が進み、そうした図譜の収集が諸大名の間で広く流行していた事が続々と明らかになっている。正敦の縁戚に限っても、たとえば正敦の実家である仙台伊達家にも博物愛好の伝統が涵養されていたことは、文化文政の博物学の隆盛にさきがけて動植物の研究に着手した博物大名として特に名高い熊本藩主細川重賢(1720—1785)に動植物の図譜が、そしておなじく博物大名のパイオニアであつた高松藩の中興の祖とされる藩主松平頼恭(1711—1771)には千に迫る数の植物図譜が、それぞれ仙台伊達家から貸与されていた事実から間接的に確認できるほか、正敦の実父伊達宗村と実兄伊達重村にも藩内の昆虫研究などの業績があること(内山1994参照)から具体的にも確認できる。ま

た、やはり正敦の実兄(宗村三男)である三河刈谷藩主土井利徳は『観文禽譜』に自ら描いた「千鳥」の図などを提供しており、利徳の四男、下総古河藩主土井利位は雪の研究書『雪華圖説』で夙に有名である(鈴木1997参照)。正敦の嗣子正衡が、おそらくは正敦の作業を補助することからはじめて『観文獣譜』および『観文介譜』を製作したことも、その源流のひとつを伊達家の博物愛好趣味に見出すことができる。この系譜についてはあらためて詳細に論ずる必要がある。

諸大名の博物学研究を網羅的に検討した研究こそ未だ現れていないが、概観の試みは福井久蔵(福井1937)以来、上野益三によるものをはじめ、様々な形で試みられている(これら諸大名の業績についても、本論では必要最小限範囲に言及するに止める)。ところが、『観文禽譜』や土井利位の正統『雪華圖説』を読み解く作業を通じて、情報の質・量ともにこれらを超越した、独特の様式の博物学的業績を生み出さんとする、組織された博物学ネットワーク(あるいは、博物学全体からみれば、その揺籃)が幕府の中枢とその近傍に形成されたとみることができると考えるにいたった。独特の様式とは、わが国の天産物の特定の分野のなかで扱われる対象の網羅性のみならず、当時のわが国において有力であった博物学の人的・情動的資源をすべて取り込んだ完備性(個人的業績でありながら大編集物の様相を呈していること)、そして和漢の文学の古典からの豊富な引用である。さらに、その成立とスタイルを規定した、寛政の改革とその後の幕府中枢およびその周辺という特殊な環境を踏まえながら、サークルの人的・形態的特徴を明らかにすることが新たな問題として浮上した。その中心人物と考えるに至った堀田正敦の博物研究の特質と、それを可能とした条件をさらに探ることは、この問題を解く手がかりとなり、同時に重要なサブテーマとなるべきものである。そしてその作業の過程で、まずもって松平定信(1758-1829)個人の影響を探る必要があるのは、彼の改革の基本理念と、とくに学術に対する姿勢が幕末に至るまで政治・文化のあらゆる面で幕閣の構成員の行動を規定し、従ってこのサークルの姿も規定していたと考えられるからである。

正敦は楽翁松平定信と政治理念および詩歌の研鑽という趣味を共有していた人物である。後にみえるように、定信は博物趣味を有していたとはいえないが、その政治上の側近として、歌学上のライバルとして、正敦は生涯密接な関係を保ち続けた。不要不急と目されることの多い博物学の営みが、正敦の場合、定信個人によって、その政治集団によって、またその「文人圏」のスタイルによっていかなる規定を受け、いかなる方向への展開を促進されたのかを明らかにするのが本論の目的である。従って、『観文禽譜』その他の業績についての科学的な検証をひとまず離れ、それらの制作者の人的関係の探求が中心となる。

『観文禽譜』に鳥の写生図を提供した人物は大名、学者らを中心に多数に上り、とくに大名についてはその概要が長岡と林(1994a,b)によって既に紹介されている。正敦が主として敷き写しによって蒐集を重ねた写生図についてのみ着目すれば、その持主が大名であることが多い上、原図の蒐集にはそのなかでも声のかけやすい面々、すなわち林(長岡・林1994b p.17)が指摘したように正敦と同じ格、——10万石以上の譜代大名と交代寄合が詰めた——帝鑑の間詰め的大名からの協力

者が多くなるのも当然である。正敦の同時代人、若桜藩主池田伯耆守定常（松平冠山、1767-1833）の夭折した第16女露姫（1817-1822）の没後、その才能と「悟りの境地」を惜しんだ当時の文化人たちが詩文や絵画をよせた『玉露童女追悼集』（1824-1825頃成立）にみえる人物のうち、大名の過半数が冠山と同じ家格、すなわち柳の間詰めの大名であることが指摘されている（玉露童女追悼集刊行会編1988 p.186）。林はそれを引き、『観文禽譜』に鳥の写生図をよせた人物に関して、「家格による交際範囲内で情報が収集されたという側面」（同上 p.18）を指摘した。しかし当時の社会の広い層で話題となったおなじ『玉露童女追悼集』には、実は、その名を連ねることが文化人の証であるといわんばかりに、（現在本に欠巻があるため推定で）およそ1,600名もが詩歌、俳句、絵画などをよせて才を誇示していた。『観文禽譜』の関係者だけでも、例えば奥医師・蘭学者の桂川家第4代甫周は達者なオランダ語で追悼文を、そして第6代甫賢が和歌を寄せている。甫賢は『観文禽譜』の成立に深く関与している（鈴木1994b参照）。蝦夷地に関する情報をオランダ語からの翻訳で提供した大槻玄澤、高橋景保（鈴木1995b pp.14-18参照）の名もみえるほか、『観文禽譜』の鳥学知識のもっとも重要なアドバイザー水野忠韶¹⁾も追悼文と俳句を寄せていた。その一方では、後に蘭学者を弾圧することとなる鳥居燿蔵も漢詩を寄せている。こうした事実がはしなくも示すように、さまざまな分野の同好の会に同じ人間が顔を出すことによってできる網の目状の交流が江戸の文化人社会の大きな特徴であったことを思えば、鳥の写生図に対象を絞っても、大名間の儀礼的交際の範囲に主たる情報収集の範囲が限定されていたと考えるのは不十分である。『観文禽譜』の鳥図に限っても、一枚の写生図が、複数の大名による敷き写しの繰り返しを経たのちに漸く正敦のもとにとどく、という例は少なくない。重要なのはむしろ、あらゆる情報が集積される幕府中枢が、こうしたネットワークを包み込んで、さらに大きな網を張り巡らせていたこと、正敦とその血縁者らがその中心にいて博物研究にそれを利用しようとしていたということであろう。そして本論を序論とする研究の対象となる「もう一つの博物サークル」の大きな意義は、諸大名の博物趣味の産物を集積し、学問的に意味のある体系化を行おうとしていたことにあるのである。

個人的に編集された図鑑である『観文禽譜』の作成は——そこに狩野派の工房や蛮書和解御用、医学館といった幕府の研究機関が公的・組織的に動員されたわけではなく——私的な営みであり、またその細密図譜が複製されるためには敷き写しによるしかなかった。従って当時の西欧で用いられた手彩色銅版画や石版印刷の技法がなかったわが国においては、大量に流布させることは不可能でもあった。しかしその内容と規模は、優に国家的編纂事業の観を呈しているのである。先取りしていえば、正敦が総裁として編纂に関わった『寛政重修諸家譜』の編纂作業などで経験した学者の人脈の巧みな操縦が、この事業を豊かにしていたといえる。嘗百社や緒鞭会のような博物学サークルから生まれた傑出した業績と、正敦周辺から生み出された業績との最大の相違点は、後者が『観文禽譜』の場合と同様に、個人の鳥学書であるほかに、様々な本草学者・鳥研究者・鳥愛好家などの見解を総合した編纂物の色彩を呈していることや、為政者の情報面でのアドバンテージが活かさ

れていることである。そしてその様式を踏襲して、正敦の嗣子正衡が『観文獣譜』、『観文介譜』などを、そして正敦の甥の土井利位が、少々様式を異にするものではあるが、『雪華図説』を著したのも、相当この様式を意図した上での、同じ流れの一端であるとみることができ、これらは「もう一つの博物サークル」の重要な業績に数えることができるのである。

楽翁文人圏と堀田正敦およびその博物研究

老中松平定信は、ほとんど同世代の正敦を、改革遂行のパートナーとして若年寄に抜擢した(1790)。正敦はその後最晩年まで42年間改革派の若年寄として幕閣に留まっている。その間には定信の老中退任(1793)とその死(1829)もあったが、定信が老中退休後も幕政に大きな発言力を保持したことは周知の事実である。定信という為政者と、その影響下にある時代の幕府中枢において営まれた博物学研究との関係を論ずるに当たり、林によって提起された、定信と正敦の「交流関係に消極的な要素を提供するかのように思われる」二つの「問題」に触れて議論の糸口とする。いずれも定信の『宇下人言』の記述をめぐるものである。すなわち

- ・定信と正敦との個人的関係について「定信は、正敦と親交があり学問上拮抗する間柄であったと言われているが、定信の随筆『宇下人言』に挙げられている数多くの「信友」の中に、正敦の名前は見当たらない」(長岡・林1994b pp.18-19)、つまりは両者はさほど親密ではなかったのではないか
- ・「天明二年に、質素儉約を大事としているこの時期に珍禽を飼うとは何事か、という理由で「信友」の一人と絶交する話が載っている」が、正敦は『観文禽譜』で「鳥を飼っていることを示して」いる。これによって「定信との間に差し障りはなかったのか」(以上長岡・林1994b p.19)

という二点である。『観文禽譜』に見られる、正敦の鳥学研究における定信に対する配慮については、朱子学者の序文を飾ったり、自序においては直接鳥(珍鳥)を飼育した経験がないと述べてたりしているいることが、明らかに定信あるいはその改革の精神に対する「言い訳」の側面をもっていることを示して、部分的には既に解答を示し(鈴木1995b pp.13-14)である(この点は後に再び論じる)。また同じ箇所では林が呈している「奇鳥珍禽を飼うことや、その図を収集するということは、当時の社会ではどのように意識されていたのであろうか」という疑問にも、『観文禽譜』が拾い上げた、社会の様々な階層を横断した鳥の愛好・研究集団の成果とその背景を描くことで答えた(1995a,b)。しかし定信の直接的な強い影響が及んだ期間と場のなかで行われた博物研究の姿を明らかにするにあたり、上記の二つの問題をそれぞれ、定信のいわゆる楽翁文人圏(松野1983参照)と堀田正敦との関わり、そして定信の博物研究に対する姿勢と対応、その思想的背景を明かすという問題と読み換えて、以下にさらに解答を進める。

第一の点のうち、まず『宇下人言』にみえる「信友」には正敦が入っていないのではないかと

いう点だが、この自伝的随筆において言及されている「信友」が、ほとんどすべて天明5年(1785)以前の記事において列挙・言及されているのみであり、しかもそれらは当時すでに藩主となっている人物であって、天明3年に白河藩主となった若い定信といわば同格の立場で交際するに至った面々であることに注意すれば、天明6年に堅田藩主堀田若狭守正富の養子となり、翌年正富を襲って藩主摂津守となった正敦がそこに登場しないことは、むしろ当然であることがわかる。そしてその「信友」たちの多くが定信の同調者にとどまり、為政者として、または文化人として彼を越えることがなかったのに対し、楽翁文人圏にあって、正敦は歌道において(例えば堀田／鈴木翻刻1996参照)、そして古典研究において「学問上拮抗」というよりは、ひとつの文芸サロンをともに指導する立場で切磋琢磨していたことを示す当時の作品は数多い。とくに文化9年の致仕の直後に定信が居を移した、面積1万7千余坪の贅を尽くした築地の下屋敷「浴恩園」²⁾を舞台とした、文芸・学術の香り高いこのサロンにおいて、正敦と定信がいわば君臨していたことを示す史料には、以下に見るように事欠くことがない。

浴恩園は広大な敷地の中に「千歳の浜」、「千代の岩橋」、「衣笠柳」などと銘打った50余箇所の「名勝」を配した雅の空間であった。文化12年(1815)、定信の依頼によって幕府歌学方北村季文が園内の名勝を詠んだ『浴恩園和歌』にも、正敦が跋を寄せている。この歌集には、松野陽一先生によって「正敦の跋文のあることといい、各名勝毎に儒家(古賀精里以下、頼春水や大田南畝らの名も見える)が詩を賦し、述斎が総まとめをしている点といい、この文人圏総動員での文芸的装飾とっていい」(松野1983 p.47)との判断がすでに示され、正敦、定信をはじめ、牧野忠精、有馬誉純、屋代弘賢などの、その顔ぶれが紹介されている。他の歌集などの共同作品をみても、ここにみえる面々とその嗣子らによって編まれていたものが大半を占めるのである。このサロン内での定信と正敦の関係も窺うことができる資料は数多く、容易に見出すことができる。

例えば、定信が生前自分の著作の中で唯一みずからが出版を意図し、実行した随筆『花月草紙』(文化13年、1816)に対して、きわめて文学的な序を寄せたのは堀田正敦その人である。彼は夢の中で、一葉の船にのって「蓬瀛の洲」に辿りつく。渚近くの賤家で、彼は窓に挟まれた「ふみ」を目にする。それは「花によそへ月になずらえて、世のため人のため、ねもごろに教しめされ」た「いたうたきしめたるみちのおくがみ」であったが、家の主の翁は「ちりにまじはる人」には持ち帰ることを許さない。ところが夢から目覚めてみれば枕元にその書があり、まさしくそれが『花月草紙』であった、というものである。そして末尾は「こは月の桂男のかき給ひしとや」と結ばれる。格調高く、古典に対する高度の素養を感じさせる一文である。同時に、「おどろきていそぎ起出つゝ、つねのごとさうぞきたてて、日かげのちりにまじらひぬるありさま、仙びとの目にはいかにみるらむ。」と述べて、3歳年少(正敦編集総裁の『寛政重修諸家譜』に従えば同年生まれ)ながら、彼を若年寄に引き立てた恩人定信を月とまで持ち上げ、自分はへりくだる敬意のたくみな表現に心憎さを覚える。この序文によって、正敦はみずからの文学における造詣の深さのほどを誇示し

ているのである。定信の作品に正敦が序を寄せたのはこれにとどまらず、老中罷免の年から没するまでの『花月日記』(1812-1828)や『花月亭筆記』のような定信の内面の直接の表現にといえるものに、彼の序がみえることに注意しておきたい。さらに上述の『浴恩園和歌』³¹⁾(跋)をはじめ、浴恩園から生み出された歌集など数多の共同作品には、正敦が序、跋、注を加えたものは枚挙に暇がない。一方正敦の自歌千二百首近くを収めた大規模な家集『水月詠藻』に長文の仮名序(文化14年、1817)を寄せているのが定信であることからしても、花月と水月の二つの雅号が暗示する、敷島の道におけるあまりにも密接な関係は実際に覆いようがないのである。

こうした両者を軸に、浴恩園における詩歌会を舞台に生み出された歌集に、『詠源氏物語和歌』(文化11年、1814、正敦主催の歌会による)、『伊豆権現法楽之詠歌』⁴¹⁾(文化15年、1818、定信主催の歌会による)、『豊原時元七百回忌詩歌』(文政8年、1825、林衡編)などがある。前二者についてみると、『詠源氏物語和歌』は『源氏物語』の(「若菜」を上下に分けた)55の各帖に一人が一首を、また「鈴虫」に林衡(大学頭林述斎)が七絶を寄せたため参加者が56名を数えており、古典を題材とした洗練された歌会があったことを窺うことができる。その参加者は諸侯とその令室、塙保己一などの学者で構成されている。正敦、とくにその『観文禽譜』との関係では、登場順に、

- ・正敦が後見していた若い仙台藩主伊達斎宗(「仙台侯蔵図」多数提供の他、藩の儒官が『観文禽譜』稿本を浄書。)
- ・『雪華圖説』(鈴木1997参照)の著者、土井利位(正敦の実の甥)の養父である、古河藩主土井利厚
- ・楽翁松平定信
- ・『観文禽譜』に「うみすゞめ一種」の写生図を提供している、若年寄越前丸岡藩主有馬誉純
- ・東京国立博物館保管本の『観文禽譜』図譜部各禽譜に自筆の題字を添えた備後福山藩主、後の老中阿部正精
- ・正敦の命で『古今要覧』等多数の業績をあげたエンサイクロペディスト屋代弘賢

が数えられる。

ちなみに、この56名のなかで、定信、松浦静山、阿部正精、巨勢利和、佐野善行、朝比奈昌始、成嶋司直、誉純、千枝子(真光寺母)、屋代弘賢、北村季文、林衡、小笠原逸阿、横田袋翁、大関増業、正敦の16名が、さきに述べた当時の江戸文化人名鑑ともいえる『玉露童女追悼集』(1824-1825頃成立)に詩文を寄せている。この追悼集は『詠源氏物語和歌』の10年以上も後に成立しており、代がかわった嗣子などの関係者も含めれば、22名もが、この文人圏から詩文を寄せたことになる。また諸侯30名の30首を収録した『伊豆権現法楽之詠歌』からは上記正敦、定信、伊達斎宗、阿部正精、のほか、改革派老中の牧野忠精、正敦の嗣子で『観文獣譜』、『観文介譜』を著した正衡の名がみえることに注目したい。

土井利位の『雪華圖説』に正敦・正衡親子が桂川甫賢ら、周辺の学者を介さずに直接協力・支援

を与えたことを直接示す資料は未だ見あたらないが、正敦との叔父・甥の関係、幕閣における老中（利位）と若年寄（正衡）の関係にくわえて、文人圏に利位の養父利厚がいた点から、彼らの学術面の関係の密接さを明らかにする端緒を開くことができよう。利位が雪という非常に局限された対象を選択したのは、幕府中枢の博物研究における手薄な分野を認識した上でのことと考えられるので、彼らの間の連絡を確認することは重要なのである（研究分野の分担に関する正敦の意図については後に論ずる）。ここで手薄というのは、利位や彼を補佐した家老鷹見泉石が目にしていた西洋の博物学書（鈴木1997参照）が対象としている分野との比較から、利位によって認識されたと思われるものである。

和歌集にわずかに名をみせるだけの人物であっても、情報網の中の役割が小さいとはいえない。たとえば『観文禽譜』に非常に頻繁に引用されている幕臣植木宣胤の鳥学書『羽譜』の、今に伝わる唯一の完本であると思われる無窮会神習文庫所蔵本には、『浴恩園和歌』に参加していた大田南畝が序（1788）をよせていた。先に指摘したように（鈴木1995b pp.22-23）、羽譜からの引用には「宣胤曰ク」のように出典が明示されることは少なく、明らかに『羽譜』に見えるものと同じ内容の情報であっても、宣胤の身分の低さのためか「或曰」云々という形で、宣胤の名が秘され、あたかも匿名の人物から直接質したかのような表現になっていることのほうがはるかに多い。学問の世界というよりは、むしろ市井に流布した鳥学書兼鳥の飼育指南書である『羽譜』の著者と、正敦とを直接結ぶ接点があったとすれば、あるいは浴恩園における正敦と南畝との交流がそれに与っていた可能性がある。そしてこの接点は、正敦と市井の鳥の情報とを結ぶ重要なパイプとなっていた可能性も高いのである。『詠源氏物語和歌』に参加している松浦静山の『甲子夜話』には、南畝が寛政の改革を揶揄した狂歌「世の中にかほどうるさきものはなし、ぶんぶというて夜もねられず」の作者であると記されている。南畝本人はこれを否定している（浜田1963 pp.128-137参照）が、結局は筆禍の古傷が、浴恩園から生まれた作品における彼の登場がこの一度しか確認できないことと無関係ではなさそうである。この文人圏の人的交流の追跡は、史料の多さに比して難しいことが多い。

しかし浴恩園から生まれた歌集に歌を寄せている人物と、『観文禽譜』図譜部および本文に情報を寄せている18の藩の藩主（明らかに複数の代にわたって正敦に協力している例もある）、旗本、学者たちといった人物との重複はさほど大きくはない。むしろ注目すべきは、『観文禽譜』に見られる、鳥の歌学書と呼ぶにふさわしいほどの、網羅的ともみえる古典からの引用（鈴木1995a参照）、そして実質的に、江戸時代の多数の学者の業績の集積物であるという『観文禽譜』の姿と文人圏との関係である。『観文禽譜』にみられる夥しい古典的和歌の引用とこのサロンとの関係は、正敦が当時最もソフィスティケートされた、古典の深い素養を背景にもつ浴恩園の和歌集団を率いていたことではじめて説明することができる（鈴木1995a参照）。そして編纂物としての『観文禽譜』との関係については、この文人圏から生み出された官編資料の存在を俟って理解が可能となる。『寛政重修諸家譜』（文化9年完成、正敦編集総裁）、『徳川実紀』（嘉永2年完成、林衡総裁）、『新編武蔵

風土記稿』(文政13年完成、林衡建議・主宰)といった今なお江戸時代の研究に欠くことのできない史料が楽翁文人圏の人脈から世にでたことを思えば、このサロンの実力のほどと、そこを舞台とする活動がけっして浮世離れした空論の世界に遊んでいたものではないことが理解できる。「こうした史料編纂が、幕政を建て直し、未来への方向性を見出すことに資するものであったことは想像に難くない。現実の政務担当者であり、史書地誌編纂の企画・実務者であり、同時に文雅の人であることは儒教的政理観の持主である彼らにとっては、極めて自然な姿勢であったはずである。」(松野1983 pp.46-47)という松野先生の見解は、この文人圏の実像に関する知見が増すにつれて、ますます実感をもって確認されるのである。『寛政重修諸家譜』は正敦が建議して編集を総裁し、寛政11年に着手、文化9年に正敦が漢文序と「條例」を寄せている。條例の最後には「さきに正敦正穀(近江宮川藩主寺社奉行堀田正穀)編集の命をかうぶり、林大學頭衡にはかりて體裁をさだめ、稿をおこせしよりこのかた正敦正穀に屬し、功をはるまでこの業をたすけしもの凡四十六人」と述べ、屋代弘賢以下を報奨しているほか、病気のために途中で作業を離脱した者の名を挙げるのも忘れていない。学者を労り、盛り立てる正敦の姿勢をよく窺い知ることができる。『諸家譜』の編纂作業で正敦を補佐した正穀は絵をよくし、やはり楽翁文人圏の文学作品にしばしば名がみえる。ちなみに彼は『観文禽譜』には「いはとり」(ライチョウ、*Lagopus mutus*)の蔵図を提供している。

史料の編纂事業において、正敦は学者支配かつ文部関係の諸職を統括するという若年寄の職務のありかたを深く学んだ。為政者としての正敦のこの姿を知ってこそ、『観文禽譜』が百花繚乱の学説に溢れることとなったことに首肯できるのである。なぜならば、正敦の研究ををサポートした学者たち——大槻玄沢が屋台骨を支えていた大槻家が正敦をパトロンとしていたほか、奥医師の桂川家、正敦が直接質していた小野蘭山(さきに述べたように彼を京都から江戸に召し出したのも正敦である)とその門人たちなど、公私を問わず喜んで正敦の研究を助ける一大勢力——が強固な情報ネットワークとして正敦を囲むことになるからである。

楽翁文人圏からは直接には博物学の業績が生み出されなかった。しかし史料編纂にみられる有能な大名・幕臣および学者の動員は、明らかにこの文人圏を中心としている。そして網羅性が要求される博物学研究の大成のために、組織的手法を取り入れることができたのも、この文人圏がそのまま、政治の中心に留まり続けた人物たちを核とすることによって、実務的性格を決して失わなかったからなのである。

松平定信と博物学

寛政の改革とその後の正敦の鳥学研究に対する定信の負の影響について、上述のように林が二点を指摘している。同じ論文の中で長岡はそれに答え、『観文禽譜』の冒頭に置かれた朱子学者尾藤二州の序にみられる『孟子』の一節(「梁惠王章句上」)が、学者との交流を楽しむ正敦の姿勢を示し、いたずらに珍鳥を追うものとは一線を劃すことによって、定信の嫌疑を解消し、正敦の拠り所

となっていたとした（長岡・林1994b p.25）。長岡は「己の楽しみだけに留まらず、同じ興味関心をもつ者を等しく引き立て」る正敦の姿勢に「朱子学を奨励する為政者としての名ばかりでない実践的な態度」（以上長岡・林1994b p.25）をみたのである。一方鈴木は、朱子学者の序こそ飾られてはいても、鳥学書である『観文禽譜』の内容には朱子学との関連を直接示すものではなく、引用された古典にすら儒学関連のものが極めて少ないことから、この序を冠したことは定信あるいは寛政の改革の精神に対する言い訳であるとみた（鈴木1995b pp.13-14）。そのほかに、朱子学者の序を配することには、朱子学と矛盾をきたすことがなかった江戸本草学の伝統に連なることを巻頭で宣言する意味もあったと考えることができる。『本草綱目』の日本における受容には、朱子学者が指導的役割を果たしてきた。徳川家康の命によって長崎で漢籍を漁っていた羅山林道春が徳川家康のもとにこの書を届け、爾来いわば官許の書となったのをはじめ、この書に対抗して日本博物学の樹立を試みた益軒貝原篤信をも含め、朱子学を教養の根底にもつ本草家たちが解釈に当たってきた。ところが、化政期にいたるまでには、それから脱皮するかのように、本草学から純粋な記載の学（博物学）への道が開けつつあったのである（鈴木1996参照）。言い訳がこれにとどまらず、『観文禽譜』仮名自序において、事実に反してまで、あえて鳥を飼育したことがないと述べている点、養父の病を癒す薬を探す際に鳥の蔵図が役に立ったという鳥研究の本草学的効用を強調する点などにも、定信が念頭に置かれていると読み取れることも同時に指摘しておいた。しかし、この言い訳でさえ、必ずしも正面から真面目に受け止める必要がないと思われることを以下に論ずる。昌平黻における異学の禁、質素儉約の精神と正敦の鳥研究の推進との微妙な絡みについて理解を深めるためには、『宇下人言』の「絶交」の一件を詳細に検討することは無駄にはならないだろう。この件は、それが定信の藩主就任の前年、満27歳の若い時分のことではあったが、彼が既にこの頃から有能と思われた改革派の同志を糾合していたから、その後の政治の場においては決して小さくはない影響を持っていた。しかしその絶交の理由とその意味には、林の理解とは異なる面があり、大いに再考すべき点が存在する。

上山藩主松平山城守信享（のぶつら、1746-1796）は放蕩を諫められ、天明2年（1782）前非を悔いて、人を介して「修業」のため12歳若い定信に親交を求めた。白河藩主として藩政にあたっていた定信はこれを承けるが、「されどこの後、また風流家の徒とならば、我よくいさむべし。いさめてき、侍らずば忽ちに絶交すべし。」という条件をつけた。その後「信享は鳥をこのむ。奇鳥珍禽をもとむ。」（以上引用は岩波文庫版『宇下人言』p.50、より。以下この版より引用。）との風聞があり、定信が「よそにてはかくいふかに侍れども、さはあらじとおもひぬ。いま衣食の事まで質素を本とし給ふに、珍禽などはいかゞなり、いかに。」と強く質すが、信享は知らぬという。しかし「いま江都中の名鳥あまたもちたるは信享に過るはあら」ざることを知らぬものはないという「よそ」の声を重ねて耳にした定信は、信享本人に彼の質素を疑う人があることを再び伝えるが、信享はやはり身に覚えはないという。ところが、領地にむかった信享に鳥を担って従った鳥商から、

定信は直接信享の嘘を確認することとなるのである。結局、諫めに対して偽ってうけがわなかったこと、そして信享の家臣の録も減じているなかでは「鳥飼ふ事あしき事にはあらざれども、時もある」べきであったことを理由として、定信は信享本人の了承を得た上で書面をもって正式に交わりを絶ったのである。

定信自身は、この『宇下人言』に現れる唯一の絶交を厳格なものとしている一方、信享に宛てた書面では「交り絶ち侍るうへは、何の事もいひ侍らじ。されど明諸侯になりて國家の翰屏となり給はばよそながらうれしからん。」と述べて、問題を当事者間の個人的問題に局限する姿勢を示しているほか、この一件が述べられている『宇下人言』自体も本来は秘められた書であった⁶⁾。しかしながら信享が寛政の改革の担い手の一人として登用されることはついぞなく、上山藩主としてのつとめにもかなりの制約が加えられたとみられる⁷⁾。老中主座であり、退休後も政治の中枢にかかわりつづけた人物と一言も言葉を交わせない状態では、実際には勤めが果たせなかったものと思われるのである。ちなみに信享の鳥道楽は高価な「奇鳥珍禽」を飼育することに終始し、博物的な興味の対象としていなかったためか、『観文禽譜』において、信享からは一切鳥に関する情報が寄せられていない。

この記述から読み取ることができる範囲では、珍鳥の飼育よりも、むしろ信享の定信に対する背信そのものが絶交の原因であると判断される。信享の「風流」が鳥でなく他の豪奢であっても、結果は同様であったであろう。贅沢を窘めるのは「信友」として当然だが、「いさめてきゝ侍らず」、すなわち事実を隠して諫言を無視した点にこそ絶交の理由があるのである。その諫言も、とくに困難な藩の財政を踏まえてなされたものであった。

定信は鳥研究には携わらなかったほか、博物学全般についても、少なくとも後世に聞こえるほどの業績を残してはいない。しかし『花月草紙』には巢立ちに失敗したトビの若鳥を飼育したエピソードがあることなどから、彼がとくに鳥を嫌悪していたわけではないことを知ることができる。また同じく随筆『花月草紙』からは彼が（おそらくはたんなる高倍率の虫眼鏡の域を出た、複葉レンズの）顕微鏡を弄んでいたことがわかる。とくに岩波文庫版『花月草紙』拾遺（三）には、蚊の腐った腹から寄生虫が這い出すさまを観察して、大方の人は「われみえずとてなしといふ」、つまり目にみえないものは存在しないのだというのが、事実は異なる、という認識に達していることが披露されている。このように、定信が徒に自然研究全般を嫌っていた様子もまったくみられないのである。むしろ薬学に対する定信の関心が浅くなかったことは、『花月草紙』のいくつかの段で自らの病と調薬に触れている事実が教えているほか、異学の禁を行いながらも、万事を掌握すべき為政者の嗜みとして、洋書にも目を通していたことに定信が言及することも多い。たてまえからして一般には禁じて、とくにロシアの脅威が実感されつつあった時代の為政者の側としては、海外からのものを含めてあらゆる情報に隅なく目を配る必要がある⁸⁾。従って徹底して学問の形式を踏まえた『観文禽譜』や、その他幕閣（とくにいわゆる寛政改革派）のメンバーの自然研究までを定信が妨げる

ことはありえないと考えられるのである。

一方、定信の趣味には、正敦と切磋琢磨した古典研究と和歌のほかに、古物の愛玩があり、楽翁文人圏の人々の協力を得て、古文書や碑銘、器物などの所在まで示した膨大な模写集『集古十種』85巻を編むに至っている。これらの趣味はすべて実父田安宗武の趣味をうけて、親子で共有したものである。『宇下人言』には、質素をとく定信からしては意外にも、器物に対する執着が述べられている（例えば藩祖ゆかりの名刀「鳴神の刀」を取り戻すべく苦心した一件、岩波文庫版p.60参照）。しかし和歌の道においては密接な関係にあった正敦がこの趣味に関与した様子はない。正敦にとくに古物愛玩趣味があったわけではないのは明らかだが、それが定信との関係を損ねた証拠もない。この関係を解く鍵は定信の交友観にある。

『花月草紙』五の巻には、他者の言に仮託した「交友の道」と題された一文がある。そこには「友はその所長を友とすべし。ふるきこと好むには、そのことに友とし、武技このむには、それを友とし、歌よむものには、その道に友とするぞよき。（中略）たゞ交りてこそあるべけれ。古にいふ管鮑の交といへども、このふたり、おなじ徳、おなじ心なりしにもあらじかし。よの中に、同じこゝろの人といふものは、いとまれなる事なるべし。たゞわが好めるかたに引いれんとするもうるさし。」とある。これが定信自身によって踏まえている以上、決して珍鳥の所有のごとき豪奢に走ることがなかった正敦と、その周辺の博物学が否定される必然性は、当初からなかったとみるべきなのである。そして正敦は定信の浴恩園以外の場にも、自ら守り育てた様々な領域の学者を通じて、さらには官僚機構を利用した情報収集によって、自由に博物学その他の学問のための交流の場を広げていったのである。

（付）文人圏の内と外

天明年間以降の国難ともいえるべき状況の下、公然と資金を注ぎ込んで博物趣味を堪能していた大名に薩摩藩主、南山老人こと島津重豪（1745－1833）がいた。1755年に早くも藩主となった重豪は、天災や木曾川の治水工事に支出を余儀なくされたことなどによって困難を極めた藩の財政を、極端な儉約によって切り抜ける一方、殖産興業・琉球の開発に努めた。そしてそのための、いわば天産物の在庫目録の作成作業である博物学をはじめ、学問の振興に意を注いだのである。彼は生涯藩政を事実上意のままにしていたが、1787年には家督を嗣子斉宣に譲って引退し、当時はまだ江戸の郊外であった高輪に隠居所を設けた（1792）。5,000坪ほどの敷地を蓬山園、屋敷を蓬山隠館とよび、名勝を配したことは定信の浴恩園に先行しているが、実際には蓬山園は植物園の様相を呈しており、また珍鳥奇鳥を中心とした小型動物園も附属していた。重豪晩年の1827年には、溢れるほどの鳥の剥製⁹⁾や骨董品をおさめる「聚珍宝庫」がつくられた。これらの点は浴恩園のアンチテーゼを見るかのようなものである。重豪が敷いた緊縮政策によって立ち直ったかのようにみえた藩の財政は、彼の博物趣味によって見事に崩壊し、斉宣は再び緊縮策を余儀なくされた。しかし重豪は娘を將軍家斉の御台所に据えることに成功し、「高輪下馬將軍」の異名をとるほどの権勢を誇っていた。そ

して定信と拮抗する一大勢力をなしていたことができるのである。重豪には多数の博物学上の業績があるが、とくに重豪の秘書役であった曾槃が編集を担当した農事のエンサイクロペディアとされる『成形図説』(30巻1,075丁)が、実は網羅的な博物学を目指した試みの一部であったことが知られている(上野1982参照)。

ここであえて重豪に言及する理由は、むしろ浴恩園文人圏の外にこそ、博物研究に勤しむ大名が多かった、その典型的な一例としてのことのみではない。すでに、大名の中では浴恩園関係者以外のほうが鳥図などの情報を多く『観文禽譜』に提供していることを述べた。重豪が提供しているのは10図に満たないが、『観文禽譜』本文における登場回数と内容の重要さは、私設動物園ともいえるべき研究施設を背景にしているだけに無視はできない。それに加えて、将軍家斉と定信との関係は、定信が着々と成果を挙げるに従い、次第に家斉がそれを疎んずるようになるため、老中就任以来実は冷却の方向にむかうこととなる一方で、重豪の三女於篤はその家斉に嫁していたのである。こうした意味で、幕府中枢を場とした博物学研究が網羅的であろうとすると、必要な人的関係の維持には細心の注意が必要な場合も当然ありうる。『観文禽譜』においても、引退後の重豪に対し、ときに「薩の老侯」という表現がなされてとくに敬意が表現されている場面などに、心遣いの一端を覗きうるように思われる場合がある。対立関係にある両者に対する配慮は為政者としての力量が問われる局面であろう。しかし正敦周辺の場合では、姻戚関係や職務上の関係を越えた情報交換の質が博物研究の質そのものを決定しかねない。さきに職務上情報が集まる若年寄という表現をしたが、権力構造の中で十全にその機能を発揮させるのは困難であることも考えられる。この点は、「もう一つの博物サークル」のなかに土井利位を定位しようとする今後の作業で十分に考察したい。

『観文禽譜』自序・附言を読む ― 研究組織の形成に通じる正敦の意図

『観文禽譜』本文の最終完成稿には正敦のかな自序と、同じく正敦のかなによる附言がみられる。自序は1794年の最初期のヴァージョン以来のものである。それに対して附言には年号の記述がないが、「齢もいたくかたぶきぬれば」(以下『観文禽譜』からの引用には鈴木が読点、濁点等を施し、若干の誤字を正した)等の言がみえることから、晩年になって加えられたことがわかる。この間に行われた校訂・増補作業同様、この附言には正敦が経た定信の文人圏への参加などの経験の増大に伴って自序からの変化がみられるほか、今後「もう一つの博物サークル」の様相を明らかにするための示唆が少なくない。本論の結びにかえて、これまでで得た楽翁文人圏に関する知見を踏まえて、附言のなかから『観文禽譜』の特徴を際だたせている三点を取り上げて検討する。

まず附言から、博物研究の姿勢に関する以下の一文を引く。「昔より本草にいたりふかき人々のあらはせしふみをみるに、草木のことはいとつばらかなれど、鳥けだものに至りてはをろそかなるものおほかりけれ。其等の疎かなるにあらず。萬のくさ木は近き野山をたづねればもとめ易く、千々の鳥けだものはしらぬせかいのものおほくして常に見難ければや。…故に草木のことはかのい

たり深き人々にゆづりていはづ、唯鳥けだものゝ、たぐひ見もし聞きもし、ゑにかきふみに載たるを
あつめてしるせしなり。」

これは、『観文禽譜』を「風流」の産物ではなく、本草という学問のなかに位置付ける宣言の一環をなすものである。かつ対象が薬品としての需要に促されて専門化がはやくから進行した植物学の分野を初めから対象の外に置き、鳥けだもの、すなわち動物の分野において網羅的な博物学を展開しようとする姿勢を示している。この姿勢が博物サークルのなかに生きるとすれば、植物と動物について記載が完了した暁には、他の分野、例えば鉱物や雪などの記載に場を広げていくこととなる。実際に正敦の意図を継承した嗣子正衡は『観文獣譜』（動物）、『観文介譜』（貝類）などの製作を試みた。もちろん植物には着手しないというのは正敦個人のみの姿勢の表明であり、例えば正敦が引き立てた御徒岩崎灌園（1786－1842）のように、正敦の影響下で網羅的な植物図譜の製作に携わった人物もいる。

次にやはり附言から、薬学としての伝統的本草学との関係についての一文をみる。すなわち「われくすしの道にくらく、野山にあそびてこれをもとむべきいとまさえなければ、つばらかにするをあたはず。たまへよにいひつたふる私方の一二をあぐ」である。

先に述べたとおり、自序によれば、初めは「父ぎみの心地そこなひ給ひし折の薬」を鳥に求めてスタートしたはずの『観文禽譜』であり、その意味では逐一本草学者に質して薬学的記事を取録することも可能であったはずである。しかし附言からは、この書が薬学としての本草学の本道を離れてなお存在の場をもちうる鳥学書であることが示されている。それによって、記載の学に中心を移していった江戸博物学の姿が、そしてフィールドに出る探検博物学者とは分化したキャビネットナチュラリストとしての正敦の姿がよく浮び上がってくるのである。

最後に、ライフワークのようになった『観文禽譜』について晩年の正敦の所感を述べた附言を引く。彼は「若き程いとまあ折の手すさびに筆をとりつるが、後ことしげき身となりぬれば、かいつどひしまゝにてして置つ。年経てこの頃ふばこの中に有しをとり出て見るに爰かしこあやまりおほくこれかれ書もらせるもすくなからず、ふたゝび校正をへざれば全本となしがたし。しかはあれど、つねにおほやけ私暇なきのみならず、齢もいたくかたふきぬれば、かゝる事に心をつくさんものうく、たゞ打見るまにまに再訂し、まだしき所は又心しらん人におほせんとてさし置きぬ」というのである。

『観文禽譜』の最初の稿（1794、正敦39歳の砌の一文）に既に付されていた自序には「萬のことふみにしるし絵にかくばかり長くつたふべきはなし。我国のいにしへはさらなり。もろこしのひじりの御代のありさまも、ふみにしるし絵にかきたればこそ今の世にも残りつれ。たゞにいひつぎかたりつがむに、いかでか永くつたふべきや。さればおほやけにまれ、わたくしにまれ、みやびたること、はかなきわざにても、すこしかどあるかぎりはうつしえ（ゑ）となし、それがことはりをしるしてわが子むまごにつたへむと思へり。この観文禽譜も其中のものなる」云々とあり、『観文禽

譜』を長く後世に伝えようとする意思が読み取れるが、それは後世の自家の子孫に向けて残すというだけの意味と解釈できる。ところが附言では「まだしき所は又心しらん人におほせん」が示すように、その「再訂」には志を嗣ぐ「人」を求めており、それをなしうる人物は、古典の中の鳥の記述に精通し、かつ鳥の歌を知り（『観文禽譜』が引用・解説している1367首もの鳥の和歌がそのような人物を要求するのである。鈴木1995a参照）、かつ本草学（的博物学）にも精通した人物にしか求め得ず、従って浴恩園のような文人圏に連なる人脈にしかほとんど求め得ないことがわかる。しかし楽翁文人圏は定信の没（1827）と正敦の没によって閉じられる。そこに身をおいて、正敦の志と人脈を継いだのは、上述のとおり嫡子正衡（1795－1854）である。彼も正敦同様若年寄となった。親子は博物のほか絵画などの文人趣味をも共有していた。しかしその正衡の「まだしき所」を補佐する「人」がなお必要である。正衡の世代には、岩崎灌園が博物学者として円熟した。若くして『観文禽譜』に協力した桂川甫賢（1797－1844）も正衡の世代に属する。『観文禽譜』の写本が岩崎家に伝わった（現在東京国立博物館保管の1本が旧岩崎文庫蔵となっていることからそれが確認できる）ことは、実際そうしたサークルが形成されたことを教えている。

さらに東京国立博物館所蔵の『観文禽譜』の一つには狩谷掖斎が朱と藍（青墨）で文献からの引用を中心に訂正を施している。そこから彼もその環の中に入ったことを知ることができるのである。次の作業は、ここに現れた人々の業績を『観文禽譜』と絡めて検討し、サークルの実情を具体的に明らかにすることである。

註 釈

- 1) 忠韶と並んで『観文禽譜』に協力した正敦周辺の有力な大名は「西尾侯」である。林（長岡・林1994b p.15）は、その確定にあたり、ともに老中をつとめた三河西尾藩主松平乗完（1752－1793）と乗寛（1777－1839）の親子のうち、『諸鳥図説』等の編纂にあたった乗寛であろうと推定した。『観文禽譜』の小禽譜「小鳥漢産」に収録された「翻麗鳥」の項には「西尾侯の蔵図の端に記してあるところでは、文政十三年（1830）春、越前屋彦四郎一鳥屋である一が鳴物（蝦夷、琉球等の産）だろうと行って持ってきた。翻麗鳥というものだという。」（鈴木注・訳）という旨の記述があるから、年齢を考えあわせれば乗寛であると確定することができる。
- 2) その豪華さは定信自身の『浴恩園假名の記』（松平1893下冊第一）から窺い知ることができる。古典研究と芸術に対しては、支出を惜しまない姿勢が見える浴恩園の経営からは、寛政の改革を厳格に強いた定信の、また別の一面を知ることができ、この事実は正敦の鳥研究に対する定信の態度を知る上でも重要である。
- 3) 『浴恩園和歌』は天理大学図書館蔵本と幕臣宮崎成身の『視聴草』収録のものが知られている。このうち後者にみえる『浴恩園和歌』は38首のみを収録しており、各名勝毎の儒家の詩を欠く。
- 4) 『国書総目録』には、『大日本歌書総覧』に従って『伊豆権現法楽詠歌』の存在のみが記され、所在

が明らかにされていない。東北大学狩野文庫所蔵の『詠源氏物語和歌』は『伊豆権現法楽之詠歌』（表紙記載表記）と合本されており、『国書総目録』に『伊豆雑詠』（詠源氏物語和歌の付）とあるものが、内容から『伊豆権現法楽詠歌』であることに疑いはない。狩野文庫新目録でも「詠源氏物語和歌 附伊豆雑歌」となっており、検索が不可能である。松野先生が『伊豆権現奉納和歌』とされておられるのもこの『伊豆権現法楽詠歌』であろう。

- 5) これより11年ほど前、信享の藩主在任中の明和8年（1771）には領内に逃散一揆があったこと（井上1988 p.485参照）が示すように、上山藩の財政も天明3年の大飢饉以前からすでに逼迫していた。
- 6) 「定信」の2文字を4文字に分解して名付けられた『字下人言』は、岩波文庫版の校訂者である定信直系の松平定光の言によれば「著者自らの手に依って、或る他の重要書類と共に、三重の箱に嚴緘の上、祕函として傳來」（松平1942 p.6）していたものが、明治年間に自然に封がとけているのが発見されたもので、しかも刊行されたのは昭和三年（1928）の定信没後百年祭にあたってのことであった。定信が嚴封を解くことを許したのは、彼の後に老中となるべき子孫に対してのみなのであり、その仮想の人物に宛ててこそ『字下人言』は書かれていたのであった。
- 7) 絶交を宣告された信享は宝暦11年（1761）から寛政2年（1790）まで藩主の地位にあり、その間5度大坂加番の役職についた。加番は將軍の親衛隊である大番の加勢役、いわば予備軍で、老中職の支配下で一年交代制、譜代大名があたった。上山歴代藩主の大坂加番勤務は、全国の譜代大名中最高の回数であるとされ（井上1988 p.490）、信享は、形式上藩主の役目を忠実に果たしているかにみえる。しかし役職についた年——明和1（1764）、明和8（1771）、安永3（1774）、安永5（1776）、安永8（1779）の各年——をみると、天明7年（1787）から宝暦5年（1793）までの定信の老中在任中には一度も勤めておらず、信享の嗣子信古（のぶふる）が大坂加番につくのは寛政4年と6年の2度、すなわち定信の老中退休の前年とその翌年である。
- 8) 例えば、正敦は馬場佐十郎、高橋景保らによるゴロウニンの『日本幽閉記』（1816）の訳書『遭厄日本紀事』（1822、オランダ語経由の重訳）にくまなく目を通していた（鈴木1995b p.14-18参照）。定信の海外情報は、この正敦を経て蘭学者から提供されていたのである。
- 9) これら剥製の製法は、重豪がPh. シーボルトの江戸参府のおり、直接伝授されたものである（鈴木1994b参照）。

引用文献

- 井上啓（1988）「上山藩」雄山閣『藩史大事典 第1巻 北海道・東北編』所収
- 上野益三（1982）『薩摩博物学史』島津出版
- 上野益三（1989）『日本博物学史』講談社学術文庫859（原版1973、平凡社）
- 内山淳一（1994）「孫太郎虫と仙台藩主——江戸後期博物趣味の一断面——」仙台市博物館『仙台市博物館調査研究報告』14所収（p.64-76）

- 玉露童女追悼集刊行会編（1988-1996）『玉露童女追悼集』全5巻、金竜山浅草寺（吉川弘文館）
- 小西正泰（1991）「博物学フィーバーの先がけ——細川重賢」、朝日選書421『科学朝日』編『殿様博物学の系譜』所収（p.7-18）
- 鈴木道男（1990）「堀田正敦の『観文禽譜』（一）——鳥類図鑑としての評価および科学史上の位置づけ——」東北大学文学部附属日本文化研究施設『日本文化研究所研究報告』第26集所収（pp.177-214）
- 鈴木道男（1994a）「堀田正敦」平凡社編『江戸博物学集成』（pp.173-188）
- 鈴木道男（1994b）「江戸鳥学の到達点—桂川甫賢『鷗鵲写真説』の周辺——堀田正敦の『観文禽譜』（二）」東北大学言語文化部『言語と文化』第2号所収（pp.21-46）
- 鈴木道男（1995a）「彩色の鳥の歌学書——堀田正敦の『観文禽譜』（三）」東北大学文学部附属日本文化研究施設『日本文化研究所研究報告』第31号所収（pp.21-46）
- 鈴木道男（1995b）「『観文禽譜』と海外——図鑑に見える江戸の異国——堀田正敦の『観文禽譜』（四）」東北大学言語文化部『言語と文化』第3号所収（pp.1-32）
- 鈴木道男（1996）狩野文庫所蔵『本草綱目』の三版本とその周辺——江戸博物学の視点から——東北大学附属図書館報「木這子」第20巻第4号（pp.1-5）
- 鈴木道男（1997）「『雪華圖説』再考」東北大学大学院国際文化研究科『国際文化研究科論集』第5号（pp.41-63）
- 長岡由美子・林純子（1994a）「堀田正敦編『禽譜』について（一）東京国立博物館美術誌 MUSEUM No.521
- 長岡由美子・林純子（1994b）「堀田正敦編『禽譜』について（二）東京国立博物館美術誌 MUSEUM No.524
- 浜田義一郎（1963）『大田南畝』吉川弘文館（引用は新装版第3版、1994による）
- 林純子（1994）「東京国立博物館保管『観文禽譜』について」上智大学大学院史学専攻院生会『紀尾井史学』第14号
- 福井久蔵（1937）『諸大名の学術と文芸の研究』原書房復刻、1976
- 藤田覚（1993）『松平定信』中公新書1142
- 堀田正敦（1816序）『水月詠藻』（静嘉堂文庫マイクロフィルム版）
- 堀田正敦催（1814）『詠源氏物語和歌』東北大学狩野文庫所蔵
- 堀田正敦編（1812）『寛政重修諸家譜』（引用は続群書類従完成会版『新訂寛政重修諸家譜』第1、1964による。）
- 堀田正敦/鈴木道男翻刻（1996）「宮城県図書館蔵『水月君自歌合』」東北大学言語文化部『言語と文化』第4号 pp.296-262
- 堀田正敦（1794序、1831完成）『観文禽譜』稿本、宮城県図書館所蔵
- 松平定信催（1818）『伊豆権現法楽之詠歌』東北大学狩野文庫所蔵（堀田正敦催『詠源氏物語和歌』と合本）
- 松平定信（1893）『楽翁遺書』（上、中、下冊）八尾書店

松平定信/松平定光校訂（1942）『宇下人言・修行録』岩波文庫版（『宇下人言』の成立年は明らかではないが、記述の最終年寛政5年よりは後、定信自身が2度目に開封したと記した文化13年以前であることのみは知られている。）

松平定信/西尾実・松平定光校訂（1939）『花月草紙』岩波文庫版（原典は文化13年（1816）序。）

松野陽一（1983）「幕府歌学方北村季文について——楽翁文人圏の人々(1)——」東北大学教養部紀要第三九号

Die Naturgeschichte-Forschung von Hotta Masa'atsu und der Forscherkreis um ihn
— Über den Salon Matsudaira Sadanobus und dessen Einfrüsse auf den Kreis Hottas —
Kan'bun-kin'pu von Hotta Masa'atsu (V)

Michio SUZUKI

In meinem Studium von *Kan'bun-kin'pu*, dem umfangreichsten Vogellexikon vor der Öffnung Japans, stellte es sich allmählich klar, daß es um den Verfasser Hotta Masa'atsu (1755-1832) eine Arbeitsgruppe gab, die sich aus Daimyos und einflußreichen Wissenschaftlern zusammensetzte. Wegen der Beamtenstellung von Hotta als Wakadoshiyori (Innenminister des Shogunats), hatte der eigentlich private Forscherkreis einen halböffentlichen Charakter. Dieser Kreis ist doch bis jetzt in der Geschichte der Naturgeschichte Japans kaum bemerkt.

Hotta führte auch mit Matsudaira Sadanobu (1758-1827) einen anderen verfeinerten Salon von Daimyos und Gelehrten, der in der grandiosen Villa von Matsudaira „Yokuon'en“ geleitet wurde. Matsudaira, der vorige Roju (Kanzler des Shogunats), hatte unter dem starkem Einfluß von Ideen des Konfuzianismus streng politische Reform durchgeführt. Er war aber andererseits tüchtiger Historiker und begabter Dichter. Hotta und Matsudaira konnten die Mitglieder mobilisieren, um manche Tanka-Sammlungen und ausführliche Sammlungen von Stammbäumen aller Fürsten.

In diesem Salon lernte Hotta geschickte Organisation der Wissenschaftler und Gelehrten. Und das hohe wissenschaftliche Niveau des Salons gab auch den Naturforschungsleistungen Hottas Genauigkeit und erweiterte in bestimmten Gebieten wie Ornithologie u.s.w. ihren Umfang.

Das wissenschaftliche Milieu beeinflusste stark die Forschungsweise des obengenannten Forschungskreises, Und dieser Kreis produzierte nach einer Methodologie manche naturwissenschaftliche Leistungen, die bisher als einzelne Arbeiten der Mitglieder betrachtet sind.